

善知鳥伝承考 (上)

— 文芸の源泉を求めて —

はじめに—うとうの神社から—

青森市安方に善知鳥神社がある。昔ここは安瀉と呼ばれていた。海鳥の群れ飛ぶ場所だったという。神社の境内に「うとうやすかた」の碑があり、海鳥の親子の姿が彫りつけてある。「うとう」は親鳥の名、「やすかた」は雛鳥。親鳥は浜辺の砂地で雛を育てる。餌を運んできて「うとう、うとう」と鳴けば、子は「やすかた、やすかた」と応えて這い出す。——このけなげな親子鳥の言い伝えをもとにしたのが謡曲『善知鳥』である。

諸国を旅する僧が陸奥の外の浜をめざしている。立山修行を終えて山をくだったところで、老人に声をかけられた。外の浜の獵師が去年の秋に亡くなったので、この簀笠を家族に届けてほしいという。そのしるしとして着ていた麻衣の袖を裂いて手渡した。僧がうけあうと老人は姿を消した。

僧は外の浜にいたり、妻と子の暮らす獵師の家を訪ねた。しるしの袖を妻が手にすれば、亡き夫のものにまちがいない。簀笠を手向けた

ところ、獵師の亡霊があらわれた。しみじみと語り出す。どうして自分は雛鳥を殺してきたのだろう。こんなにもわが子がかわいいならば、親鳥とて雛がかわいくないはずはない……。そう言っつて子の髪をなでようとしても、雲が隔てるように姿が見えなくなってしまう。

嘆きはつづく。ほかに暮らしのたづきもなく、鳥や獣を捕らえることをなりわいとするしかないこの身だった。それでも、なんとむごい殺生をつづけたことか。「うとう」と呼べば「やすかた」と応える。それをねらって捕らえたのだ。親鳥は空から血の涙をふらす。獵師は簀笠をつけて赤い涙をはらう。いくらよけても、ふりかかる涙で目もくらむばかり。この世ではそんなはない海鳥だったが、あの世では化鳥となつてわが身をさいなむ。今さら帰らぬ身のうらみごとをつらねつつ、「助けて賜べや、御僧、助けて賜べや」と言い残し、獵師の姿はかき消えてしまった。

この曲が能楽の舞台にかかるとき、後シテの獵師の亡霊は、おのが罪業の懺悔をかさねながらも、鳥を打ちさえるさまを演じていく。何かに憑かれたごとくである。とむらいに手向けた笠で血の雨をよけ

る。その所作もすさまじく、痛ましい。

どうしてこんな詮無い物語が生まれたのか。どこにも救いが無いではないか。はじめただけのこの哀話に、しかし多くの人が魅せられた。なぜだろう。

本稿は謡曲『善知鳥』から説き起こし、作者の問題をかえりみつづ、そこに至る文芸の系譜を訪ねる。つづいて中世における救いをありかを仏教文献のなかに探っていく（以上、本号）。さらにこの主題を追いつづけ、ついに放擲するしかなかったひとりの文人の足跡をたどる。そうした作業を通じてこの物語の悲しみの根源にせまりたい。

一 親子鳥の哀話

『善知鳥』の世界

謡曲『善知鳥』の現代語訳を試みたい。観世流の寛永卯月本を底本とする新編日本古典文学全集本を用いた。⁽¹⁾ワキは旅僧、シテは老人姿の獵師の亡霊、後シテは獵師の亡霊、ツレはその妻、子方（台詞なし）は子の千代童である。次のようにはじまる。

旅僧 「私は諸国を旅する僧です。まだ陸奥の外の浜を訪ねたこと

がないので、思い立って外の浜へ出かけることにしました。

よい機会なので立山修行もしたく思います」

旅僧 「道を急いだので立山に着きました。ゆっくりと見物したい

ものです」

旅僧 「さてこの立山に来てみれば、目の当たりに広がる地獄の光景。これを見ても怖がらない人がいるなら鬼よりもおぞましい。山道が分かれ、その先は地獄・餓鬼・畜生道に通じているのでしょうか……。涙があふれてなりません。罪を悔いて時を過ぎ、ふもとに降りました」

老人 「もし、そこにおられるお坊様、申しあげたいことがございます」

旅僧 「どんなご用件ですか」

老人 「陸奥へ下られるなら言伝てをお願いしたいのです。外の浜で獵師をしていた者が去年の秋亡くなりました。妻子の家を訪ねて、そこにある蓑笠を手向けるよう伝えてください」

旅僧 「無理なことをうかがいました。お届けするのはたやすいことですが、ただそれだけ伝えても先方は承知しないのでは」

老人 「なるほど確かな品がなくては困るかもしれません。いや、思い出したことがあります。亡くなるまでこの老人が来ていた麻衣、その袖を解きましょう」

地謡 「これをするしの品にと涙ながらに手渡して、分かれたあとには雲や煙が立つ立山の、木の芽も萌える春、はるばると旅僧は陸奥へ下って行く。亡者は泣く泣く見送ったきり、姿を消してしまった」

——ここまでが立山を舞台とした前場である。流派によっては、このあと外の浜にたどり着いた旅僧と所の者との問答がある。亡くなった獵師の家は「あの高もがりの屋の内」だといふ⁽²⁾。高もがりは忌垣^{いがき}であろう。死人の出た家にめぐらす殯^{もがり}の柵で囲垣^{いがき}ともいふ⁽³⁾。旅僧が訪ねてみれば、そこに妻と子がぼつねんと暮らしていた。つづいて後場に移る。

妻 「どうなるのかわからないのが世のつねと思つてはみても、

はかなく結ばれた夫と死に別れ、忘れ形見のこの子までが深い悲しみを誘う。母はどうしたらよいのでしょうか」

旅僧 「こちらのお宅へ案内をお願いします」

妻 「どなたですか」

旅僧 「諸国を旅する僧ですが、立山で修行していたところ、恐ろしい老人が現れ、陸奥へ下るなら言伝を頼みたく、外の浜の獵師の家を訪ね、ここにある蓑笠を手向けてほしいとおっしゃいました。確かな品がなくては無理だと申しあげたところ、御召し物の袖を解いて渡されたのでここへ持つて参りました。もしや思い当たることがありますまいか」

妻 「これは夢でしょうか。亡き夫のことかと思うと涙が出ます。

なんとも気がかりなので、形見の着物、粗末な衣ですが」

旅僧 「ひさかたぶりの形見の品を」

妻 「今取り出して」

旅僧 「よくよく見れば」

地謡 「疑いもなく、薄い布地の一重^{ひとえ}の衣。合わせてみれば袖も合わさり、ああ、なつかしい夫の形見。そこでさっそく巾の仏事を色々と営み、とりわけ故人の望んだ蓑笠を手向けたのである」

旅僧 「南無幽霊出離生死頓証菩提（亡き霊よ、生死のくりかえしを脱し、すみやかに成仏せんことを）」

獵師 「陸奥の、外の浜なる呼子鳥、鳴くなる声は、うとうやすかた」

獵師 「一見卒都婆永離三悪道（ひとたび卒塔婆を拜すれば、地獄・餓鬼・畜生の三悪道の苦しみからのがれられよう）。この経文のとおりなら、わが身のために卒塔婆を立てて供養してくだされば功德にあずかれないはずはありません。紅蓮・大紅蓮地獄の水といえど仏の名号と智慧の火に溶け、焦熱・大焦熱地獄の炎といえど仏法の水に消えぬものはない、とはいへけれど、あまりに重い罪を犯した自分は、いつになったら安心を得られるのか。鳥や獣を殺したこの身が」

地謡 「衆罪如霜露慧日（あまたの罪も霜露のように仏の智慧の日

「の光で消える）。この経文にあるとおり、日の光で照らし

てくだされ、お坊様」

地謡 「所は陸奥、うしろは海、松原の下枝が蘆とまじわり、汐に
しおたれた浦里の苦屋。囲いもまばらで月の光が漏れ、外に
いるような外の浜の、あわれを誘うこの住まい」

妻 「声をかけたら姿が消えてしまうのではないかと恐れ、親子
が手をとりあつてただ泣くばかり」

猟師 「ああ、以前はあんなに親しかった妻や子も、今は隔てられ
たまま泣くしかない。どうして雛鳥を殺してしまったのか。
わが子がこんなにいとおしいなら、鳥や獣も同じはず。千代
童の髪をなで、ああなつかしいと言おうとすれば……」

地謡 「迷いのはての雲の隔てか、悲しいことに今まで見えていた
子の姿は、はかなくどこかに隠れてしまう。子隠れの木隠れ
笠、笠ならば津の国の和田の笠松、簑ならば箕面みのの滝、たぎ
る涙で袖を濡らすばかり。蓑笠がかえって隔てとなり、苦屋
の内が見たくとも、わが身は家の外。外の浜の浜千鳥が鳴く
ように、泣くよりほかにすべもない」

地謡 「ありし日のことは遠くにかすんで何もかも夢のよう、旧知
の人も木の葉が落ちるようになかばは土に帰った」

猟師 「どうせこの世で暮らすにしても、土農工商の家に生まれず」

地謡 「琴やら碁やらで遊び暮らし書画をたしなむ身分になれず」

猟師 「明けても暮れても殺生で生計を立てていくしかなかった」

地謡 「春の日は遅く暮れても仕事に追われて時をついやし、秋の

夜は長くとも漁り火がともるなかで寝るひまもなく」

猟師 「夏の太陽の下で暑さも忘れ」

地謡 「真冬の朝に寒いとも言えず」

地謡 「鹿を追う猟師は山を見ずというが、わが身の苦しさも悲し
さも忘れて鳥を追ひ、高縄で捕らえ、引き潮の海で風が吹き
荒れるなか、衣の濡れるのもいとわず、沖の干潟をめざして
いく。あの世で身を焦がす報いがあるのもかえりみず、殺生
をつづけた口惜しさ。それにしても、うとうやすかたという
鳥は、鳥にもいろいろ捕り方があるなかに」

猟師 「わけてもむごいことか、この鳥の」

地謡 「木々の梢に羽を敷くなり、波間に浮き巣でも作ればよいも
のを、愚かなことに砂原に子を産み、親は隠したつもりに
なって、『うとう』と呼べば、子は『やすかた』と応え、そ
れでやすやすとつかまってしまふのだ。やすかたは」

猟師 「うとう」

地謡 「親鳥は空から血の涙を降らす。濡れまいと菅簑や笠を傾け、
あちこちに隠れ場所を捜しても、隠れ笠や隠れ簑でもない限
り、降りかかる血の涙で目もくらみ、何もかも真っ赤に染
まって見える。かささぎの羽の橋がもみじの色に染まるよう
に」

地謡 「この世では、うとうやすかたに見えた鳥が、あの世では化

鳥となって、罪人を追いかけて、鉄のくちばしを鳴らして羽ばたき、銅の爪を磨きあげ、まなこをつかんで肉を裂く。叫ぼうにも猛火の煙でむせんで声も出ない。おしどりを殺した報いか。逃げようとしても立ちあがれない。羽抜け鳥を殺した報いか」

獵師 「うとうは今や鷹になり」

地謡 「自分は雉になってしまった。のがれがたいこと、交野かたのの狩り場の花吹雪。空には鷹、地には犬が責めたてる。うとうやすかた、やすらぐ間もないこの身の苦しき。お助けください、お坊様、お助けください……。そう言いながら、消え失せてしまった」

——以上が『善知鳥』の物語である。

物語の生成と受容

この曲の上演に関するもつとも古い証言は嵯川親元の『親元日記』に見える。寛正六年（一四六五）二月二十三日の条に足利義政臨席による仙洞御能の予告記事があり、観世による「うのはやしま」等十番と予備分の「あしかり よりまささ」等七番が記されている。日記の写本には「あしかり」の脇に小さく「うとふ」⁽⁴⁾とある。二十七日の予

定が雨で中止になり、翌二十八日に挙行された。予定の十番が一曲だけ変更して演じられ、さらに「うとふ かつららき」等五番が追加された。⁽⁵⁾この記事が『善知鳥』成立の下限とされる。⁽⁶⁾

これにつづくのが青蓮院尊応の『粟田口猿楽記』である。永正二年（一五〇五）四月十三日に今春太夫による勸進猿楽がおこなわれた。その初日興行で「風山 清経 熊野 美人草 うとふ」等八番が演じられたとある。⁽⁷⁾金春禅竹の孫禅風の能楽伝書『禅風雑談』に、永正十一年（一五一四）正月の「八幡に法楽」の記事がある。⁽⁸⁾これは東大寺の手向山八幡宮でおこなわれた奉納能とされる。⁽⁹⁾そこで「相生 八嶋 野ノ宮 空八形」等七番が演じられたとある。観世方が「善知鳥」の名で呼ぶ演目を金春座では「空八形」と呼んだ。これはなぜか。

以上の演能記録に先立ち、文正元年（一四六六）以前の成立とされる軍記物『大塔物語』に「うつほ鳥」の歌がある。信濃国守護の小笠原氏のもとで国一揆が勃発した。守護勢の中に大塔の要塞で討死した人々がいる。そのひとり常葉下総守は十三歳で出陣したわが子の悲運を嘆いて古歌を思い起こした。そこには「陸奥のそとの浜なるうつほ鳥子はやすかたのねをのみぞなく」とある。⁽¹⁰⁾「うとう鳥」とあってよいところが「うつほ鳥」となっている。これについては国語史からの指摘がある。⁽¹¹⁾

文明十六年（一四八四）成立の辞書『温故知新書』は、鳥の名「鶇」

に「ウツホトリ」の傍訓を附している。⁽¹²⁾『節用集』諸本もこれに従うが、そのなかで室町末期に書写された『伊京集』は「ウツヲトリ」と傍訓を附している。⁽¹³⁾平安時代の後半になるとハ行音は語頭を除いてワ行音に移行していく。「ウツホ」の音価は「ウツヲ」に変化し、さらに「ウツヲ」が長音化して「ウトウ」になったという。⁽¹⁴⁾『大塔物語』所載の歌に「うつほ鳥」とあるのは、したがって「うとう鳥」表記の古態を示していたことが知られる。

室町時代編纂の辞書『運歩色葉集』は「善知鳥」に「ウトウ」の傍訓を附し、割注に「悪知鳥^{ヤスカタ}」と記す。⁽¹⁵⁾『大塔物語』では「やすかた」は雛鳥の鳴き声として詠まれていたが、ここでは鳥の名である。さらに観世方は「善知鳥」と表記するが、金春方は「虚八姿」と記すとある。後者については、異国から「虚舟」で流された人々の魂が鳥になったという出典不詳の伝承を記し、「虚」の由来を説いている。これは「ウツホ」と読ませたにちがいない。「虚八姿」は『禪風雑談』に「空八形」とあったのにつながる。『運歩色葉集』はさらに欄外に「ミチノクノソトノハマナル有藤鳥リ子ハヤス方トネヲノミヅナク」の歌を載せている。「有藤」はウトウと読むのだろう。同書には天正十七年（一五四八）の識語があり、この書込は書写段階での附加と判断されている。⁽¹⁶⁾

冷泉派の歌人正徹の『草根集』に「隔ゆく憂身をそとの浜風にくたく泪ややすかたの鳥」とあり、さらに「我そ今身をうたふ鳥紅の泪の

簀を君きたれとて」の歌がある。⁽¹⁷⁾ここでも「やすかたの鳥」「うたふ鳥」とある。同書は一条兼良による文明五年（一四七三）の序を有する。兼良の編著『連珠合璧集』には「うとふやすかたアラバ、そとの浜みのかさ涙の雨」とある。⁽¹⁸⁾この書は連歌の寄合集で、文明八年（一四七六）の一条冬良書写本が伝わる。

聖護院准后道興の『廻国雜記』に「うとふ坂こえて苦しき行末をやすかたとなく鳥の音もかな」の歌がある。⁽¹⁹⁾これは道興が立山修行の後、諸国を遍歴した際に関東川越の鳥頭坂で詠んだ歌である。文明十九年（一四八七）以後のことになる。いずれも謡曲『善知鳥』と同じ素材が用いられている。この曲に依拠したものか、あるいは次節で述べる古今集注釈の説話がもとは今のところ決められない。しかしこの頃すでに周知の物語であったことが知られる。

前述の『粟田口猿楽記』以後には宗積の『藻塩草』に「子をおもふ涙の雨の笠の上にかゝるもわひしやすかたの鳥」の歌がある。つづけていわく、やすかたの鳥は三角柏という榎に備えて神前に供する。親鳥が「うとう」と呼べば雛は「やすかた」と応えて這い出す。そこを捕らえるのだが、そのとき親が鳴いて涙を雨のように降らす。「その涙かゝりて身のそんする故に」⁽²⁰⁾蓑笠を着るとある。謡曲の物語そのままではないか。この書は永正十年（一五一三）頃の成立とされる。

謡曲に先行するもの

御伽草子『鴉鷲物語』に「子に過ぎたる宝さらになし。子をおもふ涙の雨の簑のうへにうとふと鳴くはやすかたの鳥こそあらめ」とある。これは異類軍記物のひとつで、登場するのはおびたらしい種類の鳥である。合戦で野伏大将の雀藤太が討死したのち、梓巫女の鴉シトがその霊を呼び寄せて語らせる場面がある。「子をおもふ」とあるのは歌の引用らしく、つづけていわく、自分は「紅の袖の露、草の陰」となった身であれば、姿は現せなくとも子雀の供魔王を見守りつづけている。朝に夕に子雀のもとに来て、「鳴々すれ共、生死の雲にへだてられ、音をだに聞かせぬ身こそ悲しけれ」とある。⁽²¹⁾ これまた謡曲の一場面を思い出させる。『善知鳥』のなかで、亡霊となった獵師がわが子の髪をなでようとしても触れられず、「あらなつかしやと言はんとすれば、惑障の、雲の隔てか悲しやな」とあった。『鴉鷲物語』は一条兼良の作とも言われ、弘治二年（一五五六）奥付の写本がある。同じく御伽草子『あさかほのつゆ』の道行き文に「つかるをすきて、そとのほま。まことや、このところは、うとうの、とりの、子のゆへに、ちのなみたを、なかつと、きこへしか」とある。⁽²²⁾ これも謡曲を下敷きにした記述にちがいない。成立は室町時代の末頃とされる。これ以降、近世の浄瑠璃や紀行、随筆などに『善知鳥』の物語はくりかえし引かれていく（次号でたどりた）。

天正末年（一五九二）以前の成立とされる『八帖花伝書』に、『善

知鳥』の面・仕舞・囃子に関する記事がある。⁽²³⁾ 能楽の作者と曲目を記した作者付には『善知鳥』がさまざまな名称で出ている。『自家伝抄』に世阿弥作として「洞八人形」とあり、割注に「空」と記す。⁽²⁴⁾ また別の箇所「空八形」とあり、脇に片仮名で「ウトウ」と記してある。⁽²⁵⁾ 「洞」も「空」もウトウと読ませた。「八人形」と「八形」は前出の「八姿」と同様にヤスカタである。『自家伝抄』は永正十三年（一五一六）以前の成立とされる。⁽²⁶⁾ 同じく作者付『能本作者註文』に世阿弥作として「善知鳥」とある。⁽²⁷⁾ これは大永四年（一五二四）の撰述である。「いろは作者註文」に「うとう」とあり、割注に「世阿」と記す。⁽²⁸⁾ 文禄三年（一五九四）以前の撰述とされる。その抄本である『歌謡作者考』に「鳥頭」とあり、割注に「世阿弥」と記す。⁽²⁹⁾

作者付はいずれも『善知鳥』を世阿弥の作とするが、現在では疑問視されている。漁師の亡霊が登場する謡曲『阿漕』^(あこぎ)は、十二大夫座の祖である川上神主の原作を世阿弥が改作したとされ、類似する主題の『善知鳥』はそれよりもさらに古色を示すという。⁽³⁰⁾ そのことがただちに成立年代を反映するわけではないとしても、作能の技法も語法も世阿弥はもとより、元雅や禅竹の系統とは明らかに異なるものと判断されている。⁽³¹⁾

同じく世阿弥の関与を否定するものの、時代をずっと下げる意見がある。『善知鳥』は修羅能の構成を踏まえており、そうした定形化がなされた後の作品だという。『金春大藏派作者付』に「空八行舟 宗

「印」とあり、金春宗筠が創作に関与したことが想定される。宗筠は一条兼良と交渉があった。兼良の名はこれまでたびたび出てきたが、『連珠合璧集』にうとう・蓑笠・涙の雨が寄合語として登場する以上、歌にかかわる説話が謡曲に先んじて存在したと推測されている。⁽³²⁾

曲のなかに王朝的な歌語と異質なものがあることも指摘された。たとえば、羽が抜け替わるころ飛べずにいる「羽抜け鳥」は中世以降の和歌や連歌に登場するという。また、地獄を描いた作品がいくつかあるなかで、殺生をくりかえしてきたことに苦悩する人物が登場するのは世阿弥以後だと判断されている。⁽³³⁾立山や外の浜という荒涼とした舞台設定についても、世阿弥が華やかな名所の風情を作中に盛り込んだのとは懸隔がある。怨霊が成仏して収束する世阿弥の作風とは異なり、何の解決もあたえずに残響をのみとどめるという点で、『善知鳥』は禅竹の時代の典型的な能楽の姿を伝えるという主張もある。⁽³⁴⁾

『善知鳥』の作者や成立時期をめぐる議論をふりかえるとき、そこからいくつかの問題が浮かびあがってくる。まず謡曲に先んじた和歌説話の所在はひとつの争点となる。次に地獄に墮ちた者の懺悔と救いのありか、むしろ救いのなさも問われねばならない。さらに類似の主題をあつかった謡曲作品とのつながりや先後関係も重要な課題である。以下に順を追って考えていきたい。

二 王朝文芸の系譜

古今伝授の鳥たち

謡曲『善知鳥』のなかで、雛鳥は親鳥の呼ぶ声を聞けば、けなげに砂から這い出てくる。雛鳥が捕まれば親鳥は血の涙を降らす。鳥でさえ親子の情愛はこんなにも濃い。それは獵師も同じだった。家族を飢えさせないためには、この鳥を捕らえて暮らしていくしかなかった。どうにもならないつらさがそこにある。そのことも追々考えていきながら、まずは親子鳥の物語のみなもとを文芸世界のなかを探ってみた。子を呼ぶ鳥のことは古くから歌に詠まれ、説話に語りつがれていた。

獵師の亡霊が詠んだ歌「陸奥の、外の浜なる呼子鳥、鳴くなる声は、うとうやすかた」に呼子鳥の名が見える。呼子鳥の歌は『古今集』に出ている。卷一に「をちこちのたづきも知らぬ山中におほつかなくも呼子鳥かな」とある。どことも知れぬ山奥で、子を呼ぶように心細げに鳥が鳴くという。この歌は謡曲『山姥』にも使われている。「遠近の、たづきも知らぬ山中の、おほつかなくも呼子鳥の、声凄き折々に、伐木丁々として、山さらに幽かなり」とある。⁽³⁵⁾深山のひびきを叙する場面である。

呼子鳥は古今伝授の三鳥のひとつとされる。あとのふたつは稲負鳥と百千鳥（あるいは都鳥）である。中世には古今集の注釈がいくつも

作られた。まとめて古今注と通称される。それは歌の家において伝授されるものだった。呼子鳥はそのなかでさかんに言及された。もとの歌とはほとんど無関係なまでにさまざまな説話が形成されていく。⁽³⁶⁾

『弘安十年古今集歌注』は「をちこちの」歌を注釈するにあたり、高麗の話というのを載せている。永蘭山の山中でのことだった。女人が抱いていた子を鷺にさらわれた。泣きながら子を呼んで捜し歩いたが、ついに見つけられずのことされた。女は鳥に生まれ変わり、「わがこ、わがこ」と鳴きつづけたという。それだから呼子鳥というのだとある。⁽³⁷⁾ ここには典拠は記されていない。この書は弘安十年（一二八七）の奥書がある。⁽³⁸⁾ 鎌倉時代の中頃である。

『毘沙門堂本古今集注』には「きとこ、きとこ」と鳴く鳥がいると記す。これという典拠はないが、子を呼ぶように聞こえるので、呼子鳥というのだとある。⁽³⁹⁾ この書は弘安九年（一二八六）の古今注『三流抄』に遅れて成立したとされる。⁽⁴⁰⁾ 同じく鎌倉中期のものだろう。

毘沙門堂本はさらに「万葉注」に出るとして、先ほどと同じ高麗の話を載せている。鷺に子を取られた女は鳥に生まれ変わり、「はこ、はこ」と鳴くという。八子鳥のことであり、それを呼子鳥というのだとある。あるいは「はやこ、はやこ」と鳴くとも記している。⁽⁴¹⁾ 「万葉注」というのは不詳である。いったい古今注では、典拠があれば記す。なくても記す。書名はあまりあてにならない。あてになるものでも該当する文章が見当たらなかったり、あっても文言が違っていたり

する。

増幅する虚構の世界

『古今秘註抄』は「もす」について記す。百舌のことか。子を呼びつづけたあげく、「もろこ、もろこ」と鳴くようになった。それで呼子鳥というのだとある。あるいはこれは八子鳥のことで、子をたくさん産んで育てる鳥だという。「しとと」の別名ともいう。しとは人の往来するあたりで子を産み育てる。雛鳥を呼ぶときは人に気づかれずに呼ぶのだという。⁽⁴²⁾ この書は鎌倉時代の末以前の成立とされる。『毘沙門堂本古今集注』にいくらか遅れるだろう。⁽⁴³⁾

どれも架空の鳥の話であることは言うまでもない。虚構の文芸世界だが、虚構だからこそ物語はますます増幅していく。王朝文芸の時代は過ぎ去ってひさしい。それだけになおさら、その世界にしがみついて生きている歌の家の者たちは、執拗なまでに懐古し、憧憬し、模倣し、あげくは創作したのである。

『新撰歌枕名寄』は「率都浜」の項に古歌を引き、「陸奥のおくゆかしくそをもほゆるつほの石文そとの浜かせ」とある。これは連歌の名寄に用いる歌枕歌集で、嘉元元年（一二三〇）頃の成立とされる。⁽⁴⁴⁾ 率都浜すなわち外の浜は歌人になじみの詞であつた。歌は西行の『山家集』雑歌に出ている。

つづけていわく、外の浜に「うとふやすかた」という鳥がいる。浜

辺の砂地に隠すようにして子を産む。獵師が親鳥をまねて「うとう、うとう」と呼べば、雛鳥は「やすかた」と応えて這い出てくる。それを獵師がつかまえる。親鳥が飛んできて、右往左往しながら鳴き叫ぶ。真つ赤な血の涙を雨のように降らせるといふ。ある歌に「子をおもふなみたの雨の血にふれははかなき物はうとうやすかた」とある。血が降りかかれば身を損なうので、獵師は蓑笠をつける。また、ある歌に「子をおもふなみたの雨の蓑のうへにかゝるもかなしやすかたの鳥」とある⁽⁴⁵⁾。親鳥うとう、雛鳥やすかた、獵師のはかりごと、血の涙、血よけの蓑。ここには謡曲の肝要なプロットが出揃っており、このときすでに完成した物語だったことがわかる。

『善知鳥』のなかで旅僧が獵師の家で蓑笠を手向けたところ、あるじの亡霊が現れて歌を詠んだ。「陸奥の、外の浜なる呼子鳥、鳴くなる声は、うとうやすかた」とあった。歌の典拠は不明である。江戸時代の謡曲注釈書『謡曲拾葉抄』に「定家卿の歌也。夫木集に入」と注された⁽⁴⁶⁾。しかし現行の『夫木和歌集』には見当たらず、定家の歌集にも見えない⁽⁴⁷⁾。

親鳥が雛を呼ぶのは古今注からの流れに沿っている。しかし雛鳥がそれに応えるところは新たな展開である。外の浜と呼子鳥を結びつけたのは連歌の名寄の伝統にもとづくであろう。残っている書物のなかでは『新撰歌枕名寄』の記述がもっとも古い。これ以上にさかのぼる物語は知られていない。

なぜ「わがこ」や「はやこ」ではなく「うとう」なのか。これは雛鳥の鳴き声が「やすかた」であることと切り離せないと思う。ここで善知鳥安方の伝承という別の系統を考える必要が生じる。これは次号で取りあげたい。

つづけて謡曲とのつながりを追うならば、『古今集』のほととぎすの歌も想起される。卷三に「思ひいづるときはの山の郭公から紅のふり出てぞなく」とある。常磐山のほととぎすは昔をいとおしみ、血をふりしほって鳴くという。『弘安十年古今集歌注』はこれに注して、「唐紅にふり出で、鳴とは、紅の泪の流るゝを云」とした⁽⁴⁸⁾。歌の本義は鳴いて血を吐くことである。「紅の泪」を流すわけではない。この解釈はまったく歌にそぐわない。しかし歌の家ではこのように解釈され伝授されたのである。ここでは鳥が血の涙をふらすという謡曲とのつながりに注目したい。

くれないの涙

室町時代の秘伝的歌集『秘蔵抄』は「ますらをのえむひな鳥をうらぶれてなみだをあかくおとすよな鳥」の歌を引いている。ここでは業平の歌に仮託され、注に「よな鳥とは、うとうと云ふ鳥をいふなり」とある。えむひな鳥はその雛で、人に捕られて「なみだをあかくおとす」という。さらに「引歌」として、「みちのくのそとの浜なる老鶴^{うらと}紅こぼす露の紅葉ば」の歌を載せる。注に「これもなみだの紅とよめ

り、奥州のそとのほまに、おほくあるとりなり」とある。第二歌に「紅こほす露の紅葉は」とあるのは第一歌の「なみだをあかくおとす」につながる⁽⁴⁹⁾。この書は永享十年（一四三八）の奥書がある。

なおまた『善知鳥』のなかで獵師の蓑笠に血の涙が降りかかるくだりに、「目も紅に、染みわたるは、紅葉の橋の、鵲か」とあった。これも古今注『三流抄』に依拠している⁽⁵⁰⁾。七夕の夜にかささがが羽を連ねて橋を架け、それが織姫と彦星の別れの涙で真つ赤に染まり、もみじの橋になるといふ⁽⁵¹⁾。同じことが歌論集『正徹物語』にも記してある⁽⁵²⁾。文安五年（一四四八）もしくは宝徳二年（一四五〇）頃の成立とされる⁽⁵³⁾。謡曲と時代が近接する。

謡曲の主題も詞章もともに和歌から連歌におよぶ伝統の延長上に位置していた。それは中世の古今注を経ており、『古今集』そのものから乖離した文芸世界のことからである。すでに指摘されているとおり、この曲は歌にちなむ説話にもとづくもので、地方的な素材にはかわりがないとされる⁽⁵⁴⁾。かたや、陸奥あるいはアイヌの民話に原素材があるのではないかという意見もある⁽⁵⁵⁾。あるいは外の浜と立山信仰をつなぐ仏教説話の存在が想定できるかもしれない⁽⁵⁶⁾。いずれも希望的な予測だが、今のところそうした例証はほとんど見つかっていない。かえって古今注のなかに物語の素材となり得る言説があった。まずそちらを尊重すべきだろう。

いったいこの主題の著しい特徴は、完成した文芸が先にあって、

次々と伝承が附加されていった点にある。『新撰歌枕名寄』に記された説話はすでにひとつの完成形態を示していた。『善知鳥』はそこに接続している。これは世阿弥はもとより観阿弥の活動時期にさえ先行する。そのことを踏まえつつも、なおそこに、みやびな文芸世界からはみ出した、生きることの苦しみ那点綴されたところに注目してみたい。

三 救いのありか

明けても暮れても殺生

平安時代の末に『梁塵秘抄』が編纂された。巻二（二四〇番）に「儂き此の世を過ぐすとて、海山稼ぐとせし程に、万の仏に疎まれて、後生我が身を如何にせん」とある⁽⁵⁷⁾。漁業も狩猟もともに仏の拒む殺生のわざにはかならない。それをなりわいとして、はかないこの世を生きていくしかないわが身である。あの世へ往つたらどうなることかと嘆息する。この歌はもとより『善知鳥』とは関係がない。まして本説などではおよそない。『風姿花伝』に「よき能と申すは、本説正しく」云々とあるとおり、謡曲の典拠とするにはよく知られた素材でなければならぬという⁽⁵⁸⁾。それでも、その訴えの痛切さにどこか通じあうものがありはしないか。

同じく巻二（三五五番）に次の歌がある。「鵜飼は可憐しや、万劫年経る亀殺し、又鵜の頸を結び、現世は斯くてもありぬべし、後生我

が身を如何にせん」とある。⁽⁵⁹⁾ 万年生きるといふ亀を餌にし、鵜に川魚を吞ませて首繩をあやつり吐き出させる。それが鵜飼の手法である。そんなむごい稼業で世を渡る身に、あの世でどんな報いがあるのか……。こちらは謡曲『鵜飼』につながるものがある。

『鵜飼』はひとりの僧が旅先で経験した話である。安房の清澄の人というから、いかにも日蓮を思わせる。無人の御堂で休んでいると、夜中に老人が現れた。鵜飼をなりわいとする者だと告げる。かつて禁漁の地で鵜を使つたため、極刑に処せられたという。もとより殺生の罪を犯しつづけた身である。懺悔の言葉をつらねて、あとを弔つてほしいと懇願した。それから鵜飼のさまを演じてみせた。鵜舟の篝火が消えるころ、やがて老人の姿も消えていく。僧は河原の石に『法華經』の文字を記し、鵜飼の成仏を助けようとする。そこへ地獄の閻魔王が現れ、經の功德によって鵜飼が極樂往生したことを告げたのである。

曲の成り立ちについては『中楽談儀』に記事がある。もと榎並の左衛門五郎の作で、これを世阿弥が改作したという。⁽⁶⁰⁾ さらに「鵜飼のはじめの音曲は、ことに観阿の音曲を写す」とあり、観阿弥の手を経たことが知られる。上演の記録は『札河原勸進猿楽記』に見える寛正五年（一四六四）の記事がもっとも古い。⁽⁶¹⁾

懺悔の場で鵜飼はしみじみ語つた。鵜舟にともす篝火は明るくとも、冥途はどんなに暗かろう。世の中がわずらわしいなら、いつそ捨

ててしまえばよいのに、そんな心も起きない。鵜使いのおもしろさにかまけて殺生をくりかえしてきた。殿上人は月がかければ悲しころうが、自分は閻夜をよろこぶ身。そんな身に生まれた因果を悔いたところで甲斐もない。今夜も鵜舟を漕ぎ出すばかりだ。はかない命をつなぐのに、これをなりわいとするしかないふがいなさ……。「叶はぬ命継がんとて、営む業の物憂さよ、営む業の物憂さよ」と嘆きを重ねる。⁽⁶²⁾

『善知鳥』も同じことを語っていた。士農工商の家に生まれることもかなわず、「ただ明けても暮れても殺生を営み」つづけるしかなく、どれほど身を焦がそうが「報ひをも忘れける、事業をなしし悔しさよ」とあつた。謡曲『阿漕』もそれを語る。「せめては職を営む田夫ともならず、かくあさましき殺生の家に生まれ 明け暮れ物の命を殺すことの悲しさよ」と愚痴る。いくら悲しかりうと、世を渡っていくためなのだ。今日も仕事に出かけるしかないという。⁽⁶³⁾

あこぎな者たちの定め

『阿漕』は伊勢の阿漕が浦で禁漁を犯して処刑された男の話である。秋風の吹く頃、参宮に向かう旅人のまゑに漁師が現れた。濡れた衣を乾かすひまもなく、渡世の憂いを語り出し、ついで阿漕が浦の古歌を引き、禁漁の由来とおのが処刑の顛末をあかして姿を消す。旅人は浜辺にたたずんで、男の菩提を弔うことにした。夜が更けてから、漁師

の亡霊がふたたび現れ、満ち潮の海に向かって網を引きはじめる。「こりもせで、なほ執心の」尺きることなく、波はやがて猛火となって男を襲う。綱にからまる魚類は毒蛇となつて男を苦しめ、地獄の水と炎がこもこもその身を責めさいなむ。「阿漕が浦の罪科つみとがを、助け給へや旅人よ、助け給へや」と叫ぶ声もたえだえに、波の底へと消えていった。

この曲の作者は知られていない。永正十三年（一五一六）以前の『自家伝抄』に世阿弥作として「安古喜」の名で出る。⁽⁶⁴⁾大永四年（一五二四）の『能本作者註文』にも世阿弥作として「安濃」の名で出る。⁽⁶⁵⁾しかし古歌の扱い方など、世阿弥の手法とまったく異なることが指摘されている。⁽⁶⁶⁾上演の記録は『言継卿記』に見える享禄五年（一五三二）の記事がもっとも古い。⁽⁶⁷⁾

『阿漕』『鵜飼』『善知鳥』は三卑賤と呼ばれてきた。いずれも殺生をなりわいとし、生前の罪で地獄に堕ちた者の物語である。ただし『鵜飼』の鵜使いは経の功德で地獄から救い出される。だが『阿漕』の漁師も『善知鳥』の獵師も救われない。『阿漕』の漁師はあさましい殺生の家に生まれた身の不遇をかこつばかり。『善知鳥』の獵師は明け暮れ殺生を営む身の情けなさを嘆く始末だった。この者たちに救いはないのか。そもそも彼らは世間からどのように見られてきたのか。

源信の『往生要集』に該当する記事がある。この書物は六道すなわ

ち死後の生まれ変わり先に関する仏教経典の抜粋集、いわゆる抄物である。地獄道から説きはじめる。その最初に等活地獄が七箇所あり、六番目を「不喜処」という。大火炎が昼夜をわかたず天を焦がしている。そこは「法螺貝を吹いたり鼓を打って恐ろしげな音をたて、鳥や獣をあやめた者が墮ちる所」と語られる。⁽⁶⁸⁾この記述は漢訳経典『正法念処経』がもとになっている。そこには「林野を遊行し、貝を吹き鼓を打ち、種種の方便にて大悪声を作す。その声甚だ畏るべし」とあり、それにたずさわるのは「悪しき業を行う者」だといふ。⁽⁶⁹⁾

この者たちを親鸞は「屠沽の下類」と呼んだ。『唯信鈔文意』にいわく、屠は「よろづのいきたるものをころしほふるもの」をいう。鳥獣魚類を屠殺する者である。それは「れうし」すなわち獵師であり漁師である。沽は「よろづのものをうりかうもの」のこと。それは「あき人」すなわち商人である。狩獵・漁業・商業の従事者はいずれも「下類」と見なされた。⁽⁷⁰⁾

しかしまた次のようにも言う。「れうしあき人、さまざまのものは、みな、いしかわらつぶてのごとくなるわれらなり」とある。⁽⁷¹⁾獵師も漁師も商人も石ころや瓦礫のような私たちそのものだという。彼らだけが下類なのではない。誰もひとしなみに下類である。ここには「屠沽の下類」が「具縛の凡愚」とならべてある。それは「よろづの煩惱にしばられたるわれら」にほかならない。ならば下類のわれらは、親鸞の奉ずる阿弥陀の救いにあずかれないのか。親鸞を宗祖とする真宗の

救済対象とはならないのか。

如来の放つ光に

阿弥陀如来はあらゆる人を救おうと誓いを立てた。その誓いを心から信じるならば、そのとき誰もが「撰取のひかりのなかにおさめとられ」という。如来の放つ光に包み込まれるのである。獵師も漁師も、石ころ同然のわれらもことごとく包摂される。こうした思いは『歎異抄』にも書きとめられた。そこには、海川に網をひき、魚を釣って生活する者も、野山で狩りし、鳥を捕って命をつなぐ者も、商売し、田畑を耕して暮らす者も変わりないとある。すべては因果の報いなのだから、どうあがいても仕方ない。ただひたすら阿弥陀如来の誓いを頼みにせよという。⁽⁷²⁾

『唯信鈔文意』は親鸞自筆本が伝わる。そこには康元二年（一二五七）の日付がある。宗祖みずからその教えを説きつづけたとしても、その範囲はいまだ限られていたろう。『歎異抄』は弟子の唯円が著したものが、「外見あるべからず」と銘記され、長らく世に知られずいた。本願寺は参詣する人もまばらな時代がつづいた。真宗の教えが広まったのは宗祖から二百年のちのことである。第八代の門首蓮如の尽力で門徒の数はふくれあがっていく。

蓮如筆『御文』第一帖に「当流の安心あんじんのおもむき」が語られる。真宗の信心において大事なものは何か。――断じて自分の心が悪いのだと

決めつけたり、迷いや執着を起こさぬようにせよというのではない。商売も奉公もするがよい。狩りも漁りすなごもするがよい。罪業を重ねるだけの生活に心をくだいていくしかない。そんな取るに足らぬ私たちでも助けてくださると、そう誓った阿弥陀様の悲願を心から信じればよいのだ。阿弥陀様に助けていただいた、その恩返しのため命のあるかぎり念仏するがよい。これこそが「安心けつじよう決定したる信心」だとい⁽⁷³⁾う。

この文は『御文』のなかでも卓絶している。どんな職業にたずさわる者であってもかまわない。「獵すなどりをもせよ」という。阿弥陀如来の救いに外れる者など、どこにもいない。そのことが高らかに宣言された。末尾に文明三年（一四七一）の日付がある。それは『鵜飼』はもとより『善知鳥』や『阿漕』にも遅れる時代のことだった。

先ほどの鵜飼を詠った今様に戻ってみれば、そこでは「鵜飼はいとほしや」と詠い出されていた。これについては文学史からの指摘がある。この歌が含まれる『梁塵秘抄』「四句神歌」の担い手は神につながる職能者であって、鵜飼は「よそ目」に見られているに過ぎない。この歌は鵜飼がみずから詠んだものとは考えがたいとい⁽⁷⁴⁾う。ただ、ここで注目したいのは、初句はたしかに第三者の視点であったも、結句が「後生わが身をいかにせん」とあって一人称に転じている点である。鵜飼本人の嘆きでないとしても、これを詠う者の嘆きがここで重⁽⁷⁵⁾なってくる。そこには生業ゆえに避けることのできない罪障の自覚が

あり、救われるべき人の姿があるにちがいない。⁽⁷⁵⁾ そうであるならば、時代はすでに下類のわれらの救いのありかを求めていた。やがてその先には、撰取不捨の利益^{りやく}にあずかる数知れぬ人々の姿が立ち現れてくる。

四 謡曲へ流れこむもの

うないおとめの末路

『善知鳥』のなかで、外の浜にある獵師の家におもむいた旅僧が亡者から託された蓑笠を手向けた。そのとき「南無幽霊出離生死頓証菩提」と唱えている。⁽⁷⁶⁾ 謡曲『求塚』に同じ経文がある。

『求塚』は菟名日^{うないおとめ}処女の物語である。『万葉集』（巻九、一八〇九番）に詠まれ、『大和物語』（一四七段）に語られている。二人の男に求婚された処女が水鳥を射当てた者の求めに応じようとした。両者ともに射当てたため、処女は入水し、男たちも刺し違えた。処女の亡霊が塚から現れ、身の咎ゆえにこうむりつづける地獄の苦しみを語り尽くす。この曲は世阿弥の『五音』に「亡父曲」とある。⁽⁷⁷⁾ 世阿弥の手が加わっているにせよ、基本的には曲も詞章も観阿弥の原作と考えられており、複式夢幻能の最初期の作例とされる。⁽⁷⁸⁾

問題の経文は旅僧が菟名日処女を弔って読経する場面に出てくる。処女の塚の前に坐した僧が「弔ふ法の声立てて、南無幽霊成等正覚、出離生死頓証菩提」と唱えた。⁽⁷⁹⁾ これはさかのばれば源信の『二十五三

昧式』に至るであろう。ここでは縁ある衆生も縁なき衆生も差別なく、すべての霊が生死の境涯を離れて菩提を得るようにと説く。⁽⁸⁰⁾ そのときの文言が「出離生死証大菩提」である。

『善知鳥』では獵師の亡霊がこの経文に感じて姿を現した。そして「陸奥の、外の浜なる呼子鳥」の歌を詠んだのち、「一見卒塔婆永離三悪道」という経文を唱えた。たとえ卒塔婆を拜しただけでも地獄・餓鬼・畜生の三悪道の苦しみからのがれられるという。わが身のために卒塔婆を立てて供養してほしいと願った。観阿弥作の『卒都婆小町』に同じ文言が見える。老いた小町が朽ち木に腰掛けていると、それは卒塔婆だと僧がさとしてこれを唱える。すると小町は「一念発起菩提心」と唱え、菩提を求める心を起こすことの功德を述べて応酬した。⁽⁸¹⁾ これは世阿弥の『知章』にも受けつがれた。旅僧が須磨の浦で卒塔婆を見つげる場面である。清盛の孫知章を供養したもので、ここが討死の場所だという。旅僧はこの経文を唱え、知章の霊が「成道正覚」を得ることを願った。⁽⁸²⁾ それは生と死のくりかえしから脱して覚醒することである。つまりは菩提を得ること、すなわち成仏である。

これはさかのばれば源信の『万法甚深最頂仏心法要』に至るであろう。そこでは「菩提心論に云う」として、「一念に発起する菩提心、百千塔を造立するより勝れたり」と説く。⁽⁸³⁾ 「菩提心論」とは不空訳『金剛頂瑜伽中発阿耨多羅三藐三菩提心論』のことだが、この文言は見当たらない。闍那崛多訳『出生菩提心経』に造寺造塔の功德を述べ

た文はあるが言葉が違う。⁽⁸⁴⁾『謡曲拾葉抄』は「華嚴經に曰く」として
いる。しかし三種ある漢訳『華嚴經』にもやはり該当する文言は見当
たらない。貞慶の『心要鈔』は「經に云う」とするのみで經典名を示
していない。⁽⁸⁵⁾

いずれにしてもその典拠は不明とするほかないが、古くから何かの
經文として知られていた。平康頼の『宝物集』に「一念菩提心をおこ
す功德、百千の堂をつくるにすぐれたり」とある。⁽⁸⁶⁾これは治承年間
(一一七七〜八一)の成立とされる。鎌倉市材木座の五所神社に弘長
二年(一二六二)銘の板碑があり、『知章』の文言と同じものが刻ん
である。⁽⁸⁷⁾鹿兒島県錦江町にある文永四年(一二六七)銘の笠石塔婆に
も同じ文言が見える。⁽⁸⁸⁾仏書記載の例として天倫楓隱の『諸回向清規』
をあげたい。⁽⁸⁹⁾永祿九年(一五六六)の撰述であるからずつと遅れる
が、これは臨済宗の年忌法要に用いた式文集であるから、この頃には
あまねく知られていたことがわかる。⁽⁹⁰⁾

紅蓮大紅蓮地獄

『善知鳥』はこの「一見卒塔婆」の經文をあげたのち、仏の名号と
その教えは紅蓮地獄と大紅蓮地獄、焦熱地獄と大焦熱地獄の責め苦を
しのぐという。「たとひ紅蓮大紅蓮なりとも、名号智火には消えぬべ
し。焦熱大焦熱なりとも、法水には勝たじ」とある。『阿漕』ではこ
れらの地獄が身をさいなむと語った。「紅蓮大紅蓮の氷に、身を傷め

骨を碎けば、叫ぶ息は、焦熱大焦熱の、焰煙雲霧、たちめに隙もな
き」とある。謡曲『歌占』も同様に語る。「ある時は、焦熱大焦熱の、
炎にむせび、ある時は、紅蓮大紅蓮の、氷に閉じられ」とある。⁽⁹¹⁾この
曲は世阿弥の『五音』に元雅の作と記された。

これはさかのほれば永観の『往生講式』に至るであろう。ここでは
「無始より以来、^{このかた}六趣に輪廻し備に諸の苦を受く。或は焦熱大焦熱の
炎に咽び、或は紅蓮大紅蓮の氷に閉じらる」と説く。⁽⁹²⁾これは承暦三年
(一一〇七九)に撰述された。さらにその源泉には源信の『二十五三昧
式』がある。そこでは「願わくば焦熱大焦熱の中、紅蓮大紅蓮の間、
遍照の光明を放ち、速かに受苦の衆生を引導せられんことを」と説
く。『謡曲拾葉抄』は源信の『三界義』をあげている。ここでは炎熱
地獄・極熱地獄・紅蓮華地獄・大紅蓮華地獄について説く。しかし内
容は一致せず、謡曲の詞章の典拠とは見なせない。⁽⁹³⁾地獄の名は多くの
漢訳仏典に説かれたが、直接の典拠としては『往生要集』にもとづく
場合が多からう。『求塚』に「まづ等活黒繩衆合、叫喚大叫喚、炎熱
極熱無間の底に、足上頭下と落つる間は」とあるごとくである。

『善知鳥』に戻って、つづく地獄の責め苦の場面では、うとうが化
鳥となつて獵師に襲いかかる。「鉄の、^{くろがね}嘴を鳴らし羽をたたき、銅の
爪を磨ぎ立てては、眼を掴んで肉を、叫ばんとすれども猛火けぶり
に、むせんで声を上げ得ぬ」とある。獵師は雉に變じて野犬や鷹に追
いかけられるという。『求塚』では鴛鴦が鉄鳥と化し、「鉄の、嘴足剣

のごとくなるが、頭をつつき髓を食ふ」とある。これもさかのほれば『往生要集』に至るであろう。前にあげた等活地獄第六の不喜処につづく箇所である。そこには嘴から炎を吐く鳥が棲み、野犬や狐が恐ろしいなり声をあげ、突如襲いかかってきて罪人の肉を食らう。堅い嘴をした虫が骨に入り込んで髓を食い荒らすとある。『往生要集』は漢訳經典に依拠するから全文漢文だが、これに加點訓読を施した書物が続々と現れた。そのひとつ最明寺本には「熱炎の嘴アル鳥、狗犬野干の其の声、極悪にシテ甚々怖畏ス可シ、常ニ来テ食噉す」とあり、「金剛嘴アル虫、骨ノ中ニ往来テ、其の髓ヲ食ラフ」とある。⁽⁹⁵⁾ こうした訓読本が謡曲の実際の源泉となったのではないか。

『善知鳥』の同じ場面、叫ぼうにも声が出ないところある箇所については、謡曲『砧』にならった可能性が指摘されている。⁽⁹⁶⁾ そこには「胸の煙の、炎にむせば、叫べど声が、出でばこそ」とある。⁽⁹⁷⁾ この曲は世阿弥の作とされる。⁽⁹⁸⁾ これまたさかのほれば源信の『二十五三昧式』に至るであろう。ここでは罪人は火炎に包まれ、煮えたぎった鉄が肝を碎く。「泣けど涙落ちず、猛火眼を焼く故なり。叫べど声出でず、鉄丸喉に満つる故なり」とある。なお、このくだりの末尾に先ほどの「出離生死証大菩提」の経文が示され、阿弥陀の名号を唱えることを勧めている。そこに参集した人々がこれを唱和したにちがいない。

「亡者の影は失せにけり」

『善知鳥』の最後の詞章は、「助けて賜へや御僧、助けて賜へや御僧と、言ふかと思へば失せにけり」である。亡霊が消え去るのは謡曲の常道のひとつだが、『阿漕』の最後はこれときわめて近い。そこには「阿漕が浦の、罪科を、助け給へや旅人よ、助け給へや旅人として、また波に入りにけり、また波の底に入りにけり」とある。いずれも『求塚』の構成にならったのではないか。そこには「なう御僧この苦しみをば、何とか助け給ふべき」と乞うたのち、先ほどの責め苦のさまが描写され、やがて塚のなかへと「亡者の形は失せにけり、亡者の影は失せにけり」となって終わる。

ここまで改めてふりかえれば、『善知鳥』の「南無幽霊出離生死頓証菩提」は観阿弥の『求塚』がこれに先んじていた。もとは源信の『二十五三昧式』があった。次に「一見卒塔婆永離三惡道」は観阿弥の『卒塔婆小町』が先んじていた。もとは源信の『万法甚深最頂仏心法要』があり、世阿弥の『知章』につながっていた。次に「紅蓮花紅蓮」と「焦熱大焦熱」の詞章は『往生要集』にさかのほることはまちがいないが、直接には『二十五三昧式』や『往生講式』にもとづいていた。それは『求塚』につながり、『善知鳥』や『阿漕』、元雅の『歌占』にも取り入れられた。あの世で化鳥に襲われるさまは『求塚』の描写が先んじていた。もとは源信の『二十五三昧式』があり、世阿弥の『砧』につながっていた。僧に助けを乞いつつも、救われるこ

とがないまま消えていくところは『求塚』が先んじており、『阿漕』でもくりかえされた。総じて構想も詞章も『善知鳥』は観阿弥の『求塚』に多くを負ったと考えられる。

謡曲の素材として取り入れられたものの多くが中世の古今注であることは前に述べた。それは『古今集』そのものから離れた文芸世界のことだった。同様に、謡曲の背景にある仏教的な語彙も、仏教經典それ自体ではなく『往生要集』のような抄物にもとづいていた。さらにそれを人々が唱える講式に加工したものにより多く依拠したにちがいない。読まれた『往生要集』よりも歌われた講式の方が直接の素材になり得たであろう。

注

- (1) 小山弘志・佐藤健一郎校注『謡曲集』2、新編日本古典文学全集、小学館、一九八九年、二〇八～二二八頁。現代語訳をおこなうにあたり、同書所載の訳文、ならびに佐成謙太郎『謡曲大観』第一卷(明治書院、一九三〇年、三八三～三九三頁)所載の訳文を参照した。いずれも仏教の語彙をそのまま用いているところがある。ここではできる限り訳出を試みた。
- (2) 伊藤正義校注『謡曲集』上、新潮日本古典集成、一九八三年、一四九頁。
- (3) 五来重『葬と供養(上)』五来重著作集第十一卷、法藏館、二〇〇九年、九五頁。謡曲本文の「高もがりの屋」について、伊藤正義は「高く結った竹矢来の小屋」と注している(『謡曲集』上、前掲書、一四九頁、注一二)。竹矢来で家を囲むのは死者の霊魂を封鎖するた

- めにほかならない。以下を参照されたい。拙著『葬儀と日本人—位牌の比較宗敎史』ちくま新書、二〇一一年、六〇頁。
- (4) 『親元日記』竹内理三編『続史料大成』第一〇巻、臨川書店、一九六七年、二二五頁。
- (5) 『親元日記』同書、二二九頁。
- (6) 佐成謙太郎『謡曲大観』第一巻、前掲書、三八一頁。
- (7) 『粟田口猿楽記』新校群書類従第十五巻、名著普及会、一九二九年、八一～八六頁。
- (8) 表章・伊藤正義校注『金春古伝書集成』わんや書店、一九六九年、四三七頁。
- (9) 林屋辰三郎校注『古代中世芸術論』日本思想大系、岩波書店、一九七三年、四八三頁。
- (10) 『大塔物語』信濃史料編纂会編『信濃史料叢書(下)』歴史図書社、一九六九年、六〇八頁。
- (11) 村田隆太郎『善知鳥』再考—「うつほどり」から「うとう」へ—『学芸国語国文学』五〇号、二〇一八年、二四五～二四七頁。
- (12) 『温故知新書』尊経閣善本影印集成、八木書店、二〇〇〇年、三五頁。
- (13) 『伊京集』中田祝夫『古本節用集六種研究並びに総合索引』勉誠社、一九七九年、六七頁。
- (14) 慶長八年(一六〇三)刊行の『日葡辞書』には、*«Vto. hum certo passoro»* 「ウター、ある鳥」とある。 *Vocabulario da lingua de Iapam com a declaração em Portugues. Companhia de Iesus. Nangasagui. 1603. fol.391vo.* 『キリシタン版 日葡辞書』勉誠出版、二〇一三年、七九四頁。
- (15) 『天正十七年本 運歩色葉集』京都大学国語国文学資料叢書、臨川書店、一九七七年、二二七～二二八頁。
- (16) 同書解説、三一八頁。
- (17) 『草根集』三「恋下」白井たつ子翻刻、ノートルダム清心女子大学古典叢書、一九六八年、一〇四頁、一三七頁。

- (18) 『連珠合璧集』十六「鳥類」木藤才藏・重松裕巳校注『連歌論集』一、三弥井書店、一九七二年、一一二頁。
- (19) 『廻国雜記』高橋良雄「中世日記行文学全評釈集成」第七卷、勉誠出版、二〇〇四年、五八〜五九頁。
- (20) 『藻塩草』卷十「鳥類」大阪俳文学研究会編『藻塩草本文篇』和泉書院、一九七九年、一四九頁。
- (21) 『鴉鷲物語』第九「両方軍手分、九月六日合戦、鴉追善、雀懸梓事」市古貞次他校注『室町物語集』上、新日本古典文学大系五四、岩波書店、一九八九年、一五八頁。
- (22) 『あさかほのつゆ』横山重・松本隆信編『室町時代物語大成』第一、角川書店、一九七三年、四〇八頁。
- (23) 『八帖花伝書』『古代中世芸術論』前掲書、五八三、五九一、六一九、六五〇頁。
- (24) 『自家伝抄』西尾実・田中允・金井清光・池田広司編『謡曲狂言』増補国語国文学研究史大成8、三省堂、一九七七年、一四五頁。
- (25) 『自家伝抄』同書、一四九頁。
- (26) 西尾実他編『謡曲狂言』前掲書、三〇九頁。
- (27) 『能本作者註文』西尾実他編『謡曲狂言』一一七〜一一八頁。
- (28) 『いろは作者註文』西尾実他編『謡曲狂言』一二五頁。
- (29) 『歌謡作者考』西尾実他編『謡曲狂言』一三七頁。
- (30) 小西甚一「阿漕の作者」『能』七卷二二号、一九五三年、三頁。
- (31) 小西甚一・草深清「善知鳥(謡曲狂言鑑賞・三)」『国文学言語と文芸』四卷二号、一九六二年、五八頁。
- (32) 小田幸子「作品研究「善知鳥」」『観世』四〇卷一、一九七三年、五、九頁。
- (33) 家原彰子「善知鳥小考―地獄描写の表現をめぐって」『同志社国文学』八五号、二〇一六年、三四頁。
- (34) 三宅晶子「歌舞能の確立と展開」ペリかん社、二〇〇一年、四一六頁。
- (35) 『山姥』小山弘志・佐藤健一郎『謡曲集』2、新編日本古典文学全集、五七八頁。
- (36) 古今注と謡曲とのかかわりについては以下の研究に学んだ。熊澤れい子「古今集と謡曲―中世古今集との関連において」京都大学文学部国語学国文学研究室『国語国文』三九卷一〇号、一九七〇年。片桐洋一「中世古今集注釈書解題(一)」赤尾照文堂、一九七一年。伊藤正義「謡曲の和歌的基盤」『観世』四〇卷八号、一九七三年。再録「謡と能の世界」上、伊藤正義中世文華論集第一卷、和泉書院、二〇一二年。
- (37) 『弘安十年古今集歌注』片桐洋一『中世古今集注釈書解題(二)』赤尾照文堂、一九七三年、三五四頁。
- (38) 『弘安十年古今集歌注』同書、四三〇頁。
- (39) 『毘沙門堂本古今集注』国文学研究資料館編『毘沙門堂本古今集注翻刻』『中世古今和歌集注釈の世界』勉誠出版、二〇一八年、四五六頁。
- (40) 片桐洋一『中世古今集注釈書解題(二)』三二頁。
- (41) 『毘沙門堂本古今集注』前掲書、四五六頁。
- (42) 『古今秘註抄』吉澤義則『未刊国文古註釈大系』第四冊、帝国教育会出版部、一九三五年、二六四頁。
- (43) 吉澤義則『未刊国文古註釈大系』二四八頁。
- (44) 神作光一「歌枕名寄」『日本古典文学大辞典』第一卷、岩波書店、一九八五年、二九四頁。
- (45) 『新撰歌枕名寄』黒田彰子編『新撰歌枕名寄(下)』古典文庫、一九八九年、一一九〜一二〇頁。
- (46) 『謡曲拾葉抄』國學院大学出版部、一九〇九年、七一三頁。
- (47) この場合に限らず、『謡曲拾葉抄』の著者が何にもとづいて該当の書名をあげたのか知りたいところである。同書における資料操作の実態については以下を参照。伊藤正義「謡曲拾葉抄」について―著者とその方法」『謡と能の世界(下)』中世文華論集第二卷、和泉書院、二〇一三年、二七一頁。
- (48) ここでは「紅の泪」につづいて、小指を噛み切つてその血で歌を記

- したという、これまた歌とまるで無関係な「日本記」の物語が紹介されている。初雁文庫本『弘安十年古今集歌注』片桐洋一「中世古今集注釈書解題(二)」赤尾照文堂、一九七一年、三六三頁。
- (49) 『秘藏抄』下「鳥部」新編国歌大観第五巻、角川書店、一九八七年、八六八～八六九頁。
- (50) 伊藤正義『謡曲集』上、新潮日本古典集成、一五五頁、注一四。ここでも「漢書云」という出所不明の記述が加わっている。『古今和歌集序聞書三流抄』片桐洋一「中世古今集注釈書解題(二)」前掲書、二五八頁。
- (52) 『正徹物語』下、久松潜一・西尾實『歌論集 能楽論集』日本古典文学大系、岩波書店、一九六一年、二三一頁。
- (53) 久松潜一・西尾實『歌論集 能楽論集』一六五頁。
- (54) 伊藤正義『謡曲集』上、新潮日本古典集成、四〇九頁。
- (55) 篠田浩一郎「善知鳥・鳥頭・有多字——日本の深層文化を求めて」『中世への旅——歴史の深層をたずねて』朝日新聞社、一九七八年、一八二頁。齊藤泰助『善知鳥物語考』桂書房、一九九四年、二五二頁。
- (56) 里井陸郎『謡曲百選——その詩とドラマ(上)』笠間書院、一九七九年、八三頁。立山信仰に加え、仏教説話の一類型である「片袖幽霊譚」の撰取についても指摘がある。亡霊があたえた片袖が形見の衣に合致するという奇譚で、永正十二年(一五一五)成立の『清涼寺縁起』や貞享四年(一六八七)刊行の『奇異雑談集』等に見えている。以下を参照。徳江元正「善知鳥」論(上)『國學院雜誌』七四巻二二号、一九七三年、一四頁。
- (57) 『梁塵秘抄』巻二「雑法文歌」川口久雄・志田延義『和漢朗詠集 梁塵秘抄』日本古典文学大系、岩波書店、一九六五年、三八六頁、二四〇番。
- (58) 『風姿花伝』「花伝第六 花修云」田中裕校注『世阿弥芸術論集』新潮日本古典集成、一九七六年、六九～七〇頁。
- (59) 『梁塵秘抄』巻二「雜」『和漢朗詠集 梁塵秘抄』前掲書、四〇七頁、三五五番。
- (60) 『世子六十以後申楽談儀』『世阿弥芸術論集』前掲書、一八四、二二七頁。
- (61) 『札河原勸進猿楽記』藝能史研究会編『田楽・猿楽』日本庶民文化史料集成第二巻、三一書房、一九七四年、一四六頁。
- (62) 『鶉飼』伊藤正義『謡曲集』上、新潮日本古典集成、一一六頁。
- (63) 『阿漕』伊藤正義『謡曲集』上、新潮日本古典集成、二八頁。
- (64) 『自家伝抄』前掲書、一四五、一四九頁。
- (65) 『能本作者註文』前掲書、一一七～一一八頁。
- (66) 伊藤正義『謡曲集』上、新潮日本古典集成、三九四頁。
- (67) 『言継卿記』高橋隆三・齋木一馬・小坂浅吉校訂『増補 言継卿記』第一、続群書類従完成会、一九六六年、一八四頁。
- (68) 源信撰『往生要集』卷上大文第一「厭離穢土」大正新修大藏經二六八二、八四巻三三頁中二四～二八行。
- (69) 『正法念処經』卷六「地獄品之二」大正新修大藏經七二二、一七巻二九頁上二二～二七行。
- (70) 『唯信鈔文意』金子大榮編『原典校註 真宗聖典』法藏館、一九六〇年、六五六～六五七頁。親鸞は『教行信証』に中国撰述文献『阿弥陀經義疏聞持記』を引いていわく、「屠」は殺生をなりわいとする者、「沽」は酒の売買にたずさわる者であり、このような「悪人」はひたすら阿弥陀仏を頼みとすることで極楽往生を上げられるという。『教行信証』「信巻」同書、二二三頁。
- (71) 『唯信鈔文意』同書、六五七～六五八頁。謡曲の基底に鎌倉新仏教の救済思想があったとする意見がある。宗祖たちが模索した新たな衆生救済のありようが芸能に採り入れられて世人に享受され、幅広い社会層への浸透がとげられたという。家永三郎「猿楽能の思想的考察」法政大学出版局、一九八〇年。再録『芸術思想史論』家永三郎集第十一巻、岩波書店、一九九八年、一九七頁。
- (72) 『歎異抄』十三、伊藤博之校注『歎異抄 三帖和讃』新潮日本古典集成、一九八一年、三一～三二頁。正安元年(一二九九)聖戒撰述の

- 『一遍聖絵』第八に、丹後穴生で思った一遍のもとに狷師漁夫が参集した記事がある。殺生をなりわいとする異装の者たちがござって合掌し、念仏にあずかったという。大橋俊雄校注『一遍聖絵』岩波書店、二〇〇〇年、八六頁。
- (73) 『御文』六、笠原一男校注『蓮如文集』岩波書店、一九八五年、二四〇～二五頁。
- (74) 木村紀子「梁塵秘抄 四句神歌」『国語国文』五二巻一、一九八三年、五〇頁。
- (75) 馬場光子「鵜飼の嘆き」『走る女 歌謡の中世から』筑摩書房、一九九二年、一三〇頁。
- (76) 蓑笠を供養に手向ける行為については、『夫木抄』巻三十二の権僧正公朝の歌「あま衣簀きて家に入るとは神やらひより忌むといふなり」を引いて、中世において蓑笠が何か不吉を感じさせていたことが指摘されている(小西甚一・草深清「善知鳥(謡曲狂言鑑賞講座・三)」前掲論文、五九頁)。その根底には蓑笠を着せて死者を葬る習俗があった。これはもともと仏教にはない発想であり、さかのぼれば記紀神話に至り着く(五来重「葬と供養(上)」前掲書、二二一頁)。天上で乱暴狼藉を働いた素戔嗚尊は「底根の国」に放逐された。風雨に見舞われ、青草を結び束ねて蓑笠をこしらえ、神々に宿を乞うた。このことがあってから、蓑笠を着て家に入ることが忌みさらわれたのである(坂本太郎他校注『日本書紀(一)』巻一「神代上」岩波書店、一九九四年、四四四頁)。権僧正公朝の歌はここから読み解くことができる。これに加えるに、蓑笠はかつて非人に強要された服装であった。時代はくだるが、天保十二年(一八四一)に信州松代藩が「穢多非人に口達」した文書に、「晴雨に限らず裾をはしり草鞋をはき雨天之節は菅笠簀相用可申候」とある。また、安政三年(一八五六)の牟礼神社文書「差上申一札之事」に、「縦大雪大雨ニ候共、下駄足駄傘日傘等者ハ一切相用イ不用、蓑笠之外相用イ間敷候事」とある(柴田道子「被差別部落の伝承と生活―信州の部落 古老聞き書き」三二書房、一九七二年、三三三～三三四頁)。
- (77) 資料五、六番)。それは殺生をなりわいとする階層の身分にかかわるだけでなかった。こうした作品を創作し実演した人々の出自がそこに投影されているという主張もある(伊藤喜良「中世後期の雑芸者と狩猟民―「善知鳥」にみる西国と東国」小笠原長和編『東国の社会と文化』梓出版社、一九八五年、一七六頁)。
- (78) 『五音』巻上、能勢朝次『世阿弥十六部集評釈』下、岩波書店、一九四四年、二〇九頁。
- (79) 小西甚一『日本文藝史Ⅲ』講談社、一九八六年、五一六頁。
- (80) 『求塚』小山弘志・佐藤健一郎『謡曲集』2、新編日本古典文学全集、二二〇頁。
- (81) 『二十五三昧式』大日本仏教全書第三二冊、仏書刊行会、一九七八年、二二二頁。
- (82) 『卒都婆小町』小山弘志・佐藤健一郎『謡曲集』2、新編日本古典文学全集、一二二頁。
- (83) 『知章』佐成謙太郎『謡曲大観』第四巻、明治書院、一九三二年、二二四二頁。
- (84) 『万法甚深最頂仏心法要』大日本仏教全書第三三冊、仏書刊行会、一九七八年、四一頁。
- (85) 闇那囉多訳『出生菩提心経』大正新修大藏経八三七、一七卷八九三頁上六〇七行。これは『往生要集』にも引いてある。源信撰『往生要集』巻上大文第四「正修念仏」前掲書、五一頁中二七〇下三行。
- (86) 『心要鈔』大正新修大藏経三三二、七一巻六〇頁中二二〇下三行。
- (87) 『宝物集』巻四、新日本古典文学大系『宝物集 閑居友比良山古人霊託』岩波書店、一九九三年、一五〇頁。
- (88) 間宮土信等編、蘆田伊人校訂『新編相模国風土記稿第四輯』巻九十五「鎌倉郡山之内庄材木座村」谷野遠蔵板、一八八八年、二〇頁。
- (89) 五味克夫「志々目家文書の再考察」『鹿兒島女子大学研究紀要』一五巻二号、一九九四年、一三三頁。
- 『諸回向清規』巻四「諸葬礼法式之部」大正新修大藏経二五七八、

- 八一卷六六頁上一三～一八行。
 (90) 拙著『位牌の成立―儒教儀礼から仏教民俗へ』東洋大学出版会、二〇一八年、一五〇頁。
 (91) 『歌占』横道萬里雄・表章校注『謡曲集』上、日本古典文学大系、岩波書店、一九六〇年、四〇一頁。
 (92) 『往生講式』大正新修大藏經二七二五、八四卷八八〇頁下一九～二二行。
 (93) 『三界義』恵心僧都全集第三卷、比叡山図書刊行所、一九二七年、六一八、六二四頁。
 (94) 『往生要集』卷上大文第一「厭離穢土」前掲書、三三頁中二四～二八行。
 (95) 『最明寺本往生要集』築島裕、坂詰力治、後藤剛編『最明寺本往生要集』汲古書院、一九九二年、六頁。
 (96) 家原彰子『《善知鳥》小考』前掲論文、二七頁。
 (97) 『砧』小山弘志・佐藤健一郎『謡曲集』2、新編日本古典文学全集、二七一頁。
 (98) 『世子六十以後申楽談儀』前掲書、一八三頁。

付記

本稿をまとめるにあたり、東洋大学文学部の原田香織先生から謡曲に
 関して多くの御教示をいただいた。記して感謝申しあげたい。

キーワード 善知鳥 謡曲 古今注 求塚 往生講式